群青列島

黒樹五郎

毎日新聞社

群青列島

毎日新聞社

群青列島（ぐんじょうれつとう）

定価九八〇円

昭和五十四年十二月五日　印刷
昭和五十四年十二月十五日　発行

著者　黒樹五郎（くろきごろう）
編集人　川合多喜夫
発行人　牧内節男
発行所　毎日新聞社
〒100 東京都千代田区一ッ橋
〒530 大阪市北区堂島
〒802 北九州市小倉北区紺屋町
〒450 名古屋市中村区名駅
印刷　中央精版
製本　大口製本

© Goro Kuroki　Printed in Japan 1979

群青列島

装幀·丹阿弥丹波子

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一

二月二十日。
午後四時。
定例の閣議を中断して、田沢総理大臣は大村外務大臣と執務室に戻った。
「緊急事態について説明したいというのだね」
白髪痩軀の田沢は、待っていた佐分利外務省アメリカ局長に訊ねた。風邪気味で体調を崩している田沢の声は、不機嫌に聞こえた。
「わが国に関係ある緊急事態が発生したため、直接総理にご説明したいと、アメリカ大使からの申し入れでございます」
佐分利局長がゆっくりと答えた。縁(ふち)なし眼鏡の奥で、外務省随一の切れ者といわれる眼が、じっと田沢を見た。
「来ているのかね」
「はあ。余程の事態とみえまして、申し入れとほとんど同時に到着しました。第一接見室に待たせてございます」
田沢は大村外務大臣を振り向いた。

「外務大臣、ともかく会うことに」
小柄な大村は、眉を微かに寄せて、うなずいた。
「総理大臣閣下、閣議中突然参上しましてお詫び申し上げます」
六尺豊かなロバート・アメリカ大使は、骨っぽい手を差し伸べた。赴任後三年目の大使は、顔なじみの大村とも握手し、佐分利に軽く目くばせし、腰を下ろすと、すぐに本論に入った。
「本国政府の訓令によりまして、アメリカ人工衛星の落下事故に関しご報告に参りました」
田沢が気抜けした表情をした。
——人工衛星の落下事故がどうして緊急なんだ。どうせ大気圏で燃え尽きる運命だ。
思わず不機嫌な色を見せて、田沢は咳払いをした。
「閣下」
ロバートが敏感に反応して、身を乗り出した。
「落下した人工衛星は特別の研究用のものです。実は数年来、合衆国は、自然科学分野の研究目的で、いくつかの人工衛星を打ち上げております。その一つが、今回落下したBM衛星です」
「なんです、そのBMというのは」
英語には自信のある大村が尋ねた。
「バイオ・ミュータント。つまり、宇宙空間での生物学的変異（ミューテーション）を研究する目的の衛星です。宇宙空間には強力な宇宙線放射能がありますから、地球上の細菌がその放射能でどう影響されるか、それを研究する目的と理解しております」
田沢が咳払いをした。

法科出で大蔵畑を歩いてきた田沢は、科学には弱い。ロバートの話が専門的になってきたので、ますます不機嫌になって、ロバート大使に鋭い視線を向けた。
「それが緊急事態とどういう関係があるのかね。あなたの緊急事態とはいったいなにかね」
じれったそうな口調になった。
「変異（ミューテーション）を起こした細菌が、わが国を汚染するとでも仰云るのですか」
科学技術庁長官を経て、科学には強いと自惚れている大村は、そう尋ねながら、自分の質問の重大さを自覚していなかった。大村は無表情にロバートを見た。
ロバート大使は、かつて上院総務として凄腕（すごうで）を誇ったころの名残りのように、皺の中で輝いている瞳をぐいと動かした。
「残念ながらその通りです」
大使はかたわらの大使館員から書類を受取って、田沢に手渡した。
「BM衛星落下時の軌道と推定落下地点、ならびに搭載していたヴィールスに関する情報です」
田沢は老眼鏡をとり出し、一センチ足らずの書類をゆっくりとめくった。途中であるページをじっと見つめ、顔をあげて眼鏡をはずした。初めて暗い表情をした。
「神丈島（じんじょうじま）というと、八丈島の南か。東京から何キロぐらい離れているかね」
佐分利局長が立ち上がり、壁の日本地図のところに行って指で計った。
「総理、八丈島まで約三〇〇キロ、神丈島までおよそ四〇〇キロです」
大村が上体を起こし、ロバートに向いた。
「大使、いまヴィールスといいましたね」

「はい」意味深長にうなずいた。
「どんなヴィールスです」
「その書類に書いてありますが、コクベッキー型のヴィールスで」
「有害なんですか、無害なんですか。それを訊いているのです」
「動物には明らかに病原性（パトジェニック）です。脳炎を起こし、致命率は五〇パーセントを超えると書いてあります」
「人間にはどうなんです」
「このコクベッキー型ヴィールスは、コクベッキーD4型といわれるもので、打ち上げ前の確認テストでは、人間には軽いインフルエンザ様の症状を起こさせる可能性があるそうですが、それ以上の致命的な病原性はないことが確認されています。しかし」
ロバート大使は顔を曇らせ、口ごもった。大村は濃い眉をあげて、鋭く大使を見つめた。ロバートは一語ずつ言葉を選んで、呟くように言った。
「この衛星はすでに二カ月にわたり宇宙空間にありますから、その間にどのような変化を受けているか、予断を許しません。私が緊急事態と申し上げるのは、そのためです」
書類を読んでいた田沢が、老眼鏡を外し、つるを唇にあててソファーにもたれ、大使に訊ねた。
「ロバート大使。その人工衛星は大気圏に突入したときに、すでに燃え尽きているのではないかね。いうまでもなく、そのヴィールスもろともにだ」
「いいご質問です。総理大臣閣下」
ロバートはベテランの議員上がりの大使らしく微笑した。

「本国からの訓令を受けましたときに、私も閣下と同じことを考えました。地球を周回している人工衛星が速度をゆるめないで落下すれば燃え尽きてしまいます」
うなずく田沢に、ロバートは暗い顔をした。
「ところが、今回落下した衛星は、かなり減速しながら大気圏に突入しています。これはNASA（宇宙航空局）が観測確認しています」
「どういうことなんです、それは」
大村が怪げんな表情で訊いた。
「不明という他ありません」
ロバート大使は困惑した顔になった。
「しかし、推測することはできます」
「ほう。どう推測しているのです」
「宇宙空間で何物かにより軽い衝突を受けた、という可能性です。衛星が破損し、あるいは減速して、ゆるやかに落下した。そう考えることは可能です」
「たとえば何物と衝突したと考えるのです」
「そう、たとえば既に打ち上げられた人工衛星や切り離しロケットの残骸とか、宇宙塵とか。それに」
「……」
「某国のスパイ衛星攻撃用レーザー光線ミサイルです」
「なんです。それは」

田沢が訊いた。
「閣下。ご承知の通り、いま地球上の隅々まで、衛星に搭載した特殊カメラですべて捉えることができます。いわゆるスパイ衛星ですが、これをレーザー光線で射ち落とすことは可能です」
「すると、なんですか、貴国の研究用衛星が某大国のレーザー・ミサイルで射ち落とされ、たまたま減速状態で大気圏に突入したと」
「あくまでも一つの可能性としてです」
大村が納得のいかぬ口調で訊いた。
「しかし、大使。仮に無事に地上に到達したとして、そのヴィールスを収めてある容器が破損しなければ、実害はないですね」
ロバートが暗い視線で大村を見た。
「NASAのデータでは、衛星が海面または地面に墜落した場合、衛星が破壊され、ヴィールス容器からヴィールスが漏出する可能性はかなり高いとみています」
しばし沈黙のあと、田沢がタバコに火をつけ、ひといき煙を吐いてからロバートを鋭くみつめた。
「いつなんです、落下は」
「一昨日、二月十八日午後七時ころと計算されています」
「正確な地点は不明だが、NASAの推定が正しいとすれば、神丈島東南約四〇〇キロの海面というわけだね」
書類をみて田沢が言った。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「官房長官」
吉行官房長官を振り向き、
「神丈島の住民について、資料をくれないか」
吉行が、柔道で鍛えたがっしりした背をみせて部屋を出て行くのを見届けて、田沢はロバートに、ＮＡＳＡの係官、特にヴィールスの専門家を加えた日米合同特別対策委員会を組織したいと伝えた。
「一応、万一の対策だけはしておこう。しかし、いまの話では、あまり危険は大きくないようだ。島にまともに落ちるわけでもないしね」
そう言う田沢に、ロバートが暗い視線を向けた。
吉行官房長官が帰ってきた。神丈島の資料を田沢に渡し、なにか耳元でささやいた。
「七十五世帯、三百十七人か。男百七十二、女百三十、中、小の学童が十五人。これでみると大半が老人だな。落下が東京から遠いのは、不幸中の幸いだ」
書類を手に、田沢が呟いた。
「官房長官。厚生大臣に事情を説明して、直ちに問題のヴィールスの特別対策専門委員会を組織させてくれ。ともかく微妙な医学的な問題だ。武山医師会長には一応知らせておくほうが無難だね。ただし、この件がもしマスコミに流れれば、憶測を生んで東京までパニックが起きかねない。一切極秘事項にしよう。大使、アメリカ側もそうしてくれ給え。官房長官。厚生大臣に特別委員の人選は極秘裡に、人数を限定して、充分に注意してやってくれと伝え給え」
吉行がうなずいた。

「承知しました、総理。ですが、神丈島の村長にだけは、極秘裡に報らせておきましたほうが」
田沢の白い眉が揺れ、厳しい色が走った。
「いや、それはいかん。村長の人物もわからんでは、一挙にパニックに陥らんものでもない」
ソファーの背にもたれ、田沢は胸を反らした。
「官房長官。きみは、一千万都民、いや、わが日本国一億の国民の生命と、三百十七人の島民の命とどちらを重くみるのかね。もち論、政治家としてだ」

七日後。
二月二十七日、月曜日。
神丈島。午前五時。
島の朝はゆっくりと明けた。
暗から明への推移は一つのドラマだ。
空と海と、さだかには分ちがたい水平線のあたりに、光が生まれ、漆黒の海を空と分けた。
光が時を刻んで天空に滲みわたった。透明な空を光の影が舞い下りて、波がしらをたたいた。
柔い光の影が、いつしか帯となって海面を打つとみる間に、光が横に走って水平線を刻み、縦に閃いて蒼穹に奔った。
その暁光の中、診療所に向う老人たちが島の一日を始めた。
「お早うあんす」
「あんす」

ある者は杖をつき、ある者は嫁に手をとられて、老人たちは竜ヶ港を見下ろす断崖の道にやってくる。

島の東南、鯨岬のそばの汐間の老人たちは、火の山の北側のシイとタブの林を抜けてやってくる。島の南端の、通称天の鼻と呼ばれる断崖の上の奈古の老人たちは、火の山の南側、フリージア群生地を抜け、隆起サンゴ礁の冠山を左に見て、同じ道に入る。

どの顔も、島に生まれ、島に生きた、わずかな楽しみと大きな苦労のあとが刻まれている。皺だらけの額に、暁の光が眩しく射した。

げんは目を細めて空を仰いだ。三十を過ぎているとは見えない若々しい肌だ。暁の光の中ではっとするほど美しい表情をした。診療所の看護婦代りに働き始めて二年のあいだ、げんは毎朝この道を診療所に通ってきた。

「けさはえろう温いのう」

汐間の老婆がげんを見て、腰を伸ばして言った。

奈古のげんは立ちどまって、老婆とふたことみこと話し、左手の断崖の上にある十尋岩に向って手を合わせた。

四年前、げんはリュウマチスに悩んでいた。左の肘と手首がときどき腫れて、熱をもった。あのころげんは二十七の女盛りだった。生娘のころから神丈織の名手で、おカイコさんの世話や桑の摘み取り、草木染と手織の一切を自分でやった。

それが、リュウマチスになって、ひと月近くのあいだ、左腕を動かすのも難儀だった。

そのころ島には医者がいなかった。以前いた老医が急逝して、村長と助役が奔走していたが、

島に来てくれる医者は簡単には見つからなかった。
亡くなった老医は、島の大半の家が集まっている椎名に住んでいた。学校から、崖下の竜ヶ港に向けて石段を少し下ったあたりに古ぼけた診療所があった。
医者が亡くなったあと、島民の面倒をみていた老保健婦のやすさんが、げんに湿布ぐすりや錠剤をくれたが、痛みはなかなか引かなかった。汐間の武衛門さんが見かねて煎じぐすりをくれたりした。
ひと月近く泣く思いをしたげんを助けてくれたのが、診療所に新しく赴任してきた木島先生だった。木島がくれた薬と腕の注射で、みるみるよくなった。
あのとき、木島は三十八だった。物静かで、淋しい目をしていた。人と話をしながら長身の背を心持ち屈め、濃い眉をあげて、ふっと遠くをみる、まつ毛の長い目に孤独の翳があった。なんでも東京の大学の偉い先生だという噂だった。その偉い先生が、なぜ急に島に来てくれる気になったのか。だれも知らなかった。
げんは木島に心酔した。いや、恋をしたのだ。
げんは若いころ、神丈島でとび切り「美しか女」だった。浅黒い肌が、小造りの鼻と愛らしい唇をひときわ魅力的にしていた。
亭主はげんが二十五の冬に死んだ。漁に出て、それっきり帰って来なかった。
木島に会って、げんは自分が一度も恋をしていなかったのに気がついた。げんは生まれて初めて恋をした。自分でも意外なほど、激しく木島を慕った。
げんは身持ちの堅い女だった。言い寄り、夜這いをしてくる若衆を、すべてはねつけた。死ん

だ亭主とはいとこで、親のきめた結婚だった。亭主が死んでから、言い寄る男は多かったが、げんは心を動かさなかった。

木島が島に来て、亡くなった老医の家を改造して診療を始めてから、一年たった春の夜、げんは夜おそく家を出て、人目を忍びながら診療所に行った。

途中、冠山の西の原野で、野生のフリージァを摘んで大きな花束をこしらえ、両手で胸もとに抱えて行った。木島に胸のうちを訴え、抱かれるつもりだった。木島はひとりで診療所に住んでいた。

診療所の裏手のツバキの林をくぐって、げんは木島の部屋の前の庭に立った。

灯は消えていた。木島の部屋は、診療所のある母屋から離れになっている。縁に面した障子はなかば開いていた。

——障子を開けて寝るとね、朝がひたひたと入ってくるんだ。

いつか木島が学校の男先生と話しているのを聞いた。それをいま、げんは思い出していた。

げんは手拭で足をきれいに拭って、そっと部屋に入った。

木島は目覚めていた。げんが着物を脱いで布団の端からすべるように入って身体を寄せると、

「げんか」

上を向いたまま静かに言い、そのまま目を閉じて、微かに震えながら抱きつくげんの背中を、片方の腕でそっと抱いた。

げんと木島は、夜が白む前までそうしていた。木島の男がめざめ、欲望と戦っているのはわかったが、げんを抱こうとはしなかった。げんの情感が昂って、強く木島の胸に乳房を触れると、

木島は片腕でげんを抑え、小さく（げん）と叱るように言った。
鶏が啼いて、げんは帰らねばと思った。急に切なくなって、木島の脇に顔を埋め、声を殺して泣いた。
木島がげんの顔を起こし、乱れた髪をなでながら（げん、俺は）と呟くように言った。
げんが木島に愛を告白したのは、あとにも先にもそれっ切りだった。
月に一度診療所に行くたびに、木島はいつも変わらぬ静かな微笑をたたえて、
「げんさん、どうだ」
と言い、まっすぐにげんを見つめる。その木島の瞳の中に、愛情が光っている。それだけでげんは心満たされてきたのだった。
二年前、保健婦のやすさんが死んだ。げんは助役にくどかれて診療所の手伝いを始めた。げんがひとり身だったから白羽の矢が立った。それはわかっていたが、助役の片桐が奈古のげんの家に来て話をもち出したとき、げんは嬉しくて、その夜布団に身体を横たえてからも、両手で胸を抱き、目を閉じて、長いあいだ身体のほてりを抑えかねていた。
げんは暗いうちに家を出て、奈古から椎名の診療所まで小一時間の道をかよった。薬の名前を覚え、注射器の消毒や繃帯の巻き方を教わった。
げんは働き者で賢い女だった。三ヵ月もたたないうちに診療所にはなくてはならぬ存在になった。初め妙な噂をしていた一部の島民も、げんの誠実な人柄にだんだん敬意を払うようになった。
半年後の旧正月の夜の祝いの席で、汐間の老婆の菊がげんに向って初めて看護婦さんと呼んだ。
黙って杯を傾けていた木島が、顔をあげてげんを見た。げんは走るように部屋を出て、庭のタ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com